

[29] アントニオ・ガデス舞踊団『アンダルシアの嵐』

≡ 孤独が似合う男の女のドラマ ≡

1995年1月27日 東京新聞 夕刊

一九九一年の秋にさよなら公演をしたアントニオ・ガデスが、新作をもって復帰するという。十二月の末に行われるその世界初演を、イタリアのジェノヴァまで見に行くことにしたものの、実のところ私の気持はちょっと複雑だった。五十代後半のダンサーにとって、三年間の休業がどういいう結果をもたらすか考えると、あまり期待はできない。あいだに離婚もしたという。かわいい奥さんをもらったら疲れ踊るのが嫌になったのだけれど、別れたら元気になって、またやる気が出たらしい、冗談半分にならずに言ったら、中年以上の男性は皆、わかるわかっていなくない。たしかにガデスというのは男の人生を感じさせる人ではある。周辺に女性の影は絶えないが、しかしこれほど孤独が似合う男も少ない。

ところがその新作は、予想をはるかに上まわる出来だった。邦題は『アンダルシアの嵐』だが、原作はスペインの国民的叙事詩『フェンテ・オペーナ』である。十五世紀に実際に起こった話を大詩人のロペ・デ・ベガが戯曲にした。日本の「忠臣蔵」のようなものだ。

* * *

中世の平和な村に、カトリック教団から派遣された代官がやってきて民衆の生活をふみにじる。しかし人々はじっと耐え、村長は抵抗しようとする若者フレンドーソ（ガデス）を村から追い出す。彼は孤独のなかで恋人のラウレンシアをしのぶが、やがて村に戻って彼女と婚礼の式を挙げる。だが代官は式場から花嫁をさらってしまった。引きちぎられた下着姿で逃げ帰ったラウレンシアを困んで、女たちが農具を手に男たちに迫る。「あんたたちがだらしがないからこんな目に全うのだ、立ち上がれ」と。

村人は団結して悪徳代官を殺した。裁判で犯人の名を問われた人々は「フェンテ・オペーナ！」と

[29] アントニオ・ガデス舞踊団『アンダルシアの嵐』

≡ 孤独が似合う男の女のドラマ ≡

1995年1月27日 東京新聞 夕刊

答える。村の名である。そして「フエンテ・オペーナとは誰だ」という重なる問いに、皆が「それは私だ！」と答えたというのである。以来、フエンテ・オペーナは平和を守るために闘う民衆の団結のシンボルになった。

この物語をバレエ化しようとしたガデスの心情には、なみなみならぬ思い入れがある。というのも、彼の父はスペイン人民戦線に志願して頭を銃弾に貫かれたのだ。奇跡的に命を取り止めたが、それでも権力への抵抗運動を生涯やめなかった父の姿を、少年のガデスは尊敬の眼でみつめていた。また彼自身、フランコ政権下のスペインでは反体制の危険分子とみなされ、フランコが反体制の活動家の死刑を決定したときには、抗議の引退をしたことがある。七九年のことだが、今回と違って、この時ばかりは自分でも二度と舞台に立つことはあるまいと思っていたそうだ。

* * *

さて舞踊作品としての『フェオンテ・オペーナ』だが、舞踊化を思い立ったのはすでに十年前のこと。構想の詰め段階に入ってからスペインの民俗舞踊を改めて勉強し直し、それを舞台芸術として磨きあげた。作中にはそれらを取り込んだ場面が幾つもある。見所となっている。広場に集う男たちが小さなビンを倒さないように複雑なステップを踏むゲームの妙技も興を誘うし、代官を迎える祝賀の踊りは肅然とした列をなし、典雅なお辞儀はまるで古風な絵巻物のように。集団で洗濯をする女達は、大きな白いシーツの塊りを頭ごしに投げあい、やがてそれを広げ持って舞台一杯にさわやかな構図を描く。そういえば、婚礼の場面でも付き添いの娘たちが花嫁の頭上で円天井のような形に布を操るし、恋人たちのパ・ド・ドウでも旅のマントが夢と現実の境界を暗

[29] アントニオ・ガデス舞踊団『アンダルシアの嵐』

≡ 孤独が似合う男の女のドラマ ≡

1995年1月27日 東京新聞 夕刊

示して効果的だった。布の使い方はこの作品の一つのポイントだと言えるかもしれない。

重くたれこめる屈辱の雫をふりきって仕事に取りかかる女の健気さといい、男に決起をうながす女たちの、ピカソの「ゲルニカ」さながらの深い悲しみといい、政治的なテーマのこの作品は、同時に女たちのドラマでもある。

* * *

こうしてこの新作『アンダルシアの嵐』はかつてのガデスを大きく越える舞踊作品に仕上がった。以前はフラメンコを主体とした作品のなかで、スター、ガデスを見せるための舞台だった。だが今度の作品は、フラメンコの場面も何か所か入ってはいるが、もっと広いスペイン全土の土壌から、世界に向けて咲いた舞踊なのである。ガデス自身それについて「ただのダンス」と言ったあとで、慎重な表情で「スペイン国民バレエかな」と言葉を添えた。とても印象的だった。

日本のダンス・ファンも、スペイン舞踊といえばフラメンコ、バレエといえばトウシューズという狭い固定観念を抜けて、現在の世界のダンス、あるいはバレエということについて、もうひと回り広い視野と深い知識を持つべき時であるかもしれない。

最後に、アンコールの演出が実に意表をつけて見事なのだが(注)、ちょっと言うのが惜しい気もする。さいわい紙数も尽きたので、これは舞台を見てのお楽しみということにしよう。

注||幕を繰り返し上げ下ろしして、次々に作中の最も感動的で美しい場面を集合的な活人画で見せ、改めて物語を喚起した。

[29] アントニオ・ガデス舞踊団『アンダルシアの嵐』

≡ 孤独が似合う男の女のドラマ ≡

1995年1月27日 東京新聞 夕刊